

会報一月号 命は循環する

目次

- ・違和感
- ・本来の命
- ・現代の格闘技
- ・武とは
- ・命は循環の構造物
- ・5W響創マンダラ

新年、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

さて、真夏のオーストラリアから真冬の日本へ戻ってきて、八方に解放された心は、また一つに集約された感覺だ。どちらも悪くない。

今月の会報は、近年の格闘技という文化に違和感を覚えている私の視点から、命の循環について話してみたいと思う。

●違和感

近年、格闘技がひとつのかつてあるかのように語られる時代になった。選手たちは「命を懸けて戦っている」と称えられ、観る者はそれに熱狂し、喝采を送る。しかし私はそこに違和感を覚える。血を流し、骨を折り、意識を失いながらまでして、人は何を証明しているのだろうか。その勝ち負けに、いったい何の意味があるのか。強さか、勇気か、根性か、人生の逆転か。だがそれらはすべて、自分という存在を証明するための戦いであり、どれほど大きく見えても円の中心は常に自分で止まっている。

●本来の命

命とは本来、自分のためにあるものではない。命とは本来、己を超えた何ものかに捧げるために与えられたものである。そうでなければ本質的に命は満足しないのだ。人は、欲望に忠実に生きるのが最も素直な生き方だと言う連中もいる。人類の歴史と尊厳を誤解している。そんな生き方をするなら、豚や犬として生きると変わらない。人間には犬猫とは違う精神がある。人間は自分以外の偉大な何かのために、その命を

燃焼させ尽くすために生まれてきた。

武道とは元来、そういう生き方を貫くための一つの道だった。武とは他人より強くなるための競技ではなかった。武とは民を守るため、国を守るために、天地の秩序を守るために、自らの命をすでに差し出している者の誓約の形だった。葉隱にある「武士道とは死ぬことと見つけたり」とは、「命なんか惜しくはない。死に場所があるなら何處でもよい、命を顧みない奴が一番強い……」そんな軽薄で自暴自棄な死の贊美ではない。あれは、すでに己の命を己のものとしていない者の境地を言葉にしたものであり、命が己の所有物ではなく天に預けられたものになつた状態を示しているのだ。何のために命を燃焼させ、捧げ尽くすか。その肚が決まっているからこそ、朗らかに軽やかになれるのだ。自分に起ることは全て引き受けるという「覚悟」が決まつてからこそ、深刻な顔や不機嫌な顔をする必要がないのだ。周囲に温かく創造的な場を創っていくことができるのだ。「全てを引き受けろ」、それが「覚悟」の本質である。それをニーチェは「運命への愛」と說いたではないか。

●現代の格闘技

ところが現代の格闘技はどうか。そこでは命は祈りではなく商品になつていなか。金、名声、ランキング、フォロワー、再生数、スポンサー、話題性、炎上、物語性……。命は「自分という商品」を磨き、市場価値を上げるための燃料として消費される。人は殴り合いながら、売れる自分を演じている。それは命を張つているように見えて、実態は命を売つているにすぎない。捧げているのではない。命を使い、命を他のものと交換しているのだ。誓つているのは天ではなく、契約書であり、市場であり、数字である。その瞬間、武は武であることをやめ、ただの流通する暴力になる。だからどれほど激しく、どれほど壮絶であつても、そこには虚が残る。魂が己の外へ一步も出でていなか。

時折、格闘技を見たり習つたりすることで不良が更生するという言葉を耳にする。確かに無秩序な暴力の中で育つた若者が、ルールある暴力に触ることで礼や秩序、忍耐や努力を学ぶことはある。だがそれは人間になつたのではない。野に放たれた獣が檻の中の獣になつただけである。社会や組織に管理されるようになつたことを、我々は更生と呼んでいるにすぎない。命の意味が立つたわけではない。

●武とは

では真に意味ある武とは何か。それはただ一つ、己の命を明確に己を超えた偉大なる何ものかへ捧げているかどうかである。天でもよい、道でもよい、和でもよい、人でもよい、国でもよい、未来でもよい、学問でもよい、真理でもよい。だが決して自分であつてはならない。

武とは本来、己を立てるための道ではなく、己を消すための道である。命を売る道ではなく、命を返す道である。

ここで一つ、現代によくある「自分と戦っている」という言葉について触れておきたい。自分と戦うとは、まだ命を自分の所有物として分割し、内側に戦争構造を作っている状態である。善い私と悪い私、強い私と弱い私を分断し、内側で殴り合わせる構図は、心を強くするどころか、必ず緊張と疲弊と自己否定を生み出す。武の道は内なる敵を殺す道ではない。内なる歪みを抱え、天の循環へ返す道である。戦う相手は自己ではない。命の健やかな流れを止める構造そのもの、すなわち市場、評価、恐怖、分断、支配といった、命を自分側に閉じ込めるすべての構造である。ここに向かう時は、人は初めて本当に武に立つ。もしこの構造の中から本物の武が現れるとしたら、その者はまず名声を捨て、金を捨て、契約を捨て、市場を捨てるだろう。そして天に返るために戦う者として現れる。だがその瞬間、その者はもうこの構造の中には居られない。そういった本物は構造的に排除されるからだ。

敢えて言わせてもらう。私たちは今、戦っているようで、実は売っているだけなのではないか。命は商品ではない。命は捧げ物だ。自分のために燃やすのではなく、天に返すために燃やす。その覚悟なき武は、どれほど派手であっても、どれほど人を熱狂させて、根源的には空虚である。

だが信じるに足るもののが消えたのではない。最初から売り場に並んでいなかつただけだ。命の意味は市場の中にもランキングの中にもフォロワー数の中にも再生数の中にもスponサーの中にもなかつた。命の意味は、いつの時代も、静かな誓いの中にだけあつた。誰にも見られず、評価もされず、金にもならず、拍手もなく、ただ天に返すために燃えている人間の中にだけある。それは武道家かもしれない、職人かもしれない、農夫かもしれない、母親かもしれない、兵士かもしれない、名もなき誰かかもしれない。だが共通しているのは、その命が「自分のものではない」という覚悟を持つて軽やかに朗らかに生きているかどうかだ。

我々は皆、命を持っているのではない。預かっているのだ。預かっている以上、返す先を持たねばならない。返す先なき命は、最後には必ず空虚になる。どれほど金を持つても、どれほど有名になつても、どれほど勝つても、どれほど愛されても、魂はどこかで必ず返す先を探し始める。それがこの違和感の正体だ。誰もが心のどこかで、この命は何のための命なのかと問われ続けている。だから我々はまず、自分の命の返し先を決めなければならない。誰のために燃えるのか、何のために耐えるのか、何のために立つののか、何のために折れないのか。それが決まった瞬間、生き方は変わる。勝ち負けの意味が変わる。苦しみの意味が変わる。働く意味が変わる。戦う意味が変わる。そしてその瞬間から、人はもう売り物ではなく、捧げ物になる。人は捧げ物として生き始めた時、初めて武に足を踏み入れる。武とは道場の中にあるのではない。競技の中にもテレビの中にもリングの中にもない。武とは今日という一日を何のために生き切るか、その一点にだけ存在している。

「ここでは私は、命は循環の構造物であると断言する。命は所有物ではない。命は健やかに流れるために与えられ、返るために預けられたものだ。水が流れを止めれば淀むよう、命もまた自分の内側で止めれば必ず淀む。どれほど満たされても、どれほど勝つても、どれほど称えられても、どれほど手に入れても、どこかに残る虚は、命が返り先を失っている兆しだ。人が命のために燃やし切っても深く満足できない理由はここにある。命は自分の内側で完結するようには造られていない。命は自己へ返ることでのみ、再び天の循環に戻る。この循環構造を私は「響創」と呼ぶからこそ、「響創の道」を歩むのだ。人と人が、人と自然が、人と時代が、それぞれの命の響きを重ね、そこから新しい調和と創造が生まれる。これが命の本来の流れである。だから、覚悟を決めて朗らかに軽やかに生きるという在り方は、単なる楽天主義ではない。それは返し先が定まつた命の自然な表情だ。Smile. Strong & Gentle. Enjoy yourself. Enjoy your life. これらはすべて、命を自己へ返すと決めた者に現れる魂の状態を言葉にしたものにすぎない。命を握りしめている者は必ずどこかで焦り、怖れ、怒りを抱える。だが命を手放し、自己へ返す覚悟を決めた者は失うものがない。だから穏やかで、だから折れず、だから朗らかで、だから軽やかになる。

● 5W 響創マンダラ

ここで 5W 響創マンダラの構造に戻ろう。

WY、信念と価値観→人間の本質とは命を自分以外のものへ捧げ切る存在である。己の命を信じ、この世界を信じろ。

WA、志と目的→世界が少しでも調和する側へ命を返す。響創の道を歩む。絶対に届かない至高へと歩むからこそ、死ぬまで歩み続けることができる。

WR、関係と和→自己・自然・社会との共鳴の中で命は循環する。

WN、行動と変化→変化の本質とは陰陽の交錯であり、破壊と再創造の循環。日々の行動が返す動きになっているかを点検する。

WO/WI、在り方と決断→返している自分が生き方になる。

この構造の中で生きる時、人は自分の満足のために生きているではなく、命を返していると言える。

命は使い、燃やし、そして返すものだ。人は、命を自己へ返し切った時、初めて深く静かに満足する。自分のために燃える人生もある。だが天に返し命を循環させる人生もある。どちらを選ぶかはいつも自分だ。だが一度返し先を定めた者の人生は、静かに朗らかに、そして確実に、世界を変え、整える側へ流れ始める。

今月も健康と健闘を。